

資料：旧上田藩上塩尻村家系図群*

高橋基泰

はじめに

本稿は、市場経済形成期村落社会の日英『対比』研究の一環をなす。筆者は上塩尻村研究グループ（仮称、以下では研究グループと略す）とともに、近世上田藩上塩尻村における親族関係と世代継承の実態を明らかにすべく、これまであまり利用されてこなかった家系図という史料を用い、独自のデータベースを構築してきた。対比研究として筆者はすでに英国ケンブリッジ州ウィリングム教区における家系図群を資料として公刊しており、本稿は日本の事例として対をなすものである¹⁾。

データベースについて

本研究グループの構築するデータベースは、最終形態としては上塩尻村関係の史料をすべて網羅するものになるであろう。だが、その基本となるのは、2200名余の上塩尻村宗門御改帳にもとづくものと、1500名弱の上塩尻家系図に

* 本稿は、筆者が研究代表者である平成14年度学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「市場経済形成期村落社会の日英『対比』研究」および研究分担者である科学研究費補助金基盤研究(B)(1)「市場経済形成期におけるコミュニティ組織の存在形態」の研究成果の一部をもちます。

1) 抽稿「英国ケンブリッジ州ウィリングム教区家系図群」『愛媛大学法文学部論集』総合政策学科編 2002年, 13。

よるものとの2種類の基本データベースである。この2種の基本データベースはまた相互にリンクづけがなされており、分析視角におうじて検索および分析が容易である²⁾。宗門改帳基本データベースについてはここでは紹介にとどめる。確認しうる限りでは現存最古の天明3年(1783年)の宗門御改帳(一~三まで)を基点に、その記載を踏襲してできた縦に長い表を、慶応4年(1868年)まで繰り返して途中の変化をたどっていったものであり、データベースとしてはきわめて素朴なものである。家系図の参照番号を記入しており、色もつけてあるため掛け合わせも一目瞭然となっている³⁾。(資料1)

家系図基本データベースについても、原本の構成をできる限り忠実に踏襲するところから構築が始まっている⁴⁾。もっとも、英国との対比をおこなうべく、原本では右から左の順であったものを左から右に転換させた。各家族ごとに一葉の家系図をなしている。各人の宗門改帳における参照番号および個人情報をコメントに記入した。また、家系図には座標をかけてあり、1人1列にし、各人の生存年度を棒グラフ形式で読み取ることができるようにもしてある⁵⁾。(資料2)だが、本稿では紙面の都合上全体の家系の流れを示すにとどめ、たちいった分析、またコメントおよび寿命グラフの総体的表示については別稿にておこないたい。

2) なお、本研究グループ(メンバーとして筆者の他、長谷部弘・村山良之・山内太・田島昇・大越良裕・岩間剛毅らがいる)は、前国際日本文化研究センター助教授(現京都大学文学部)落合恵美子氏のご好意によりユーラシア・プロジェクト宗門帳用データベース(SHUMON)を用いての分析も現在進めている。

3) この宗門改帳および家系図の掛け合わせの検討は、拙稿「近世上田藩上塩尻村における家系図の「家族」と宗門改帳の「家族」:系譜関係・親族関係・世代継承」『村落社会研究』19, 2003。

4) 拙稿「日英村落比較史的的分析試論:親族構造と世代継承」愛媛大学経済学会『愛媛経済論集』1998年第18巻第2号, 付録家系図。

5) ごく原始的であるが、家系図データベースは報告者が作成したものである。だが、発想の基礎には、オーストリアの家族史家、ミッテラウアーらによる家族構成員ライフサイクル表がある。同様のやり方で日本の複雑な事例を表現した例としては、Masao Takagi, 'Landholdings and the family life cycle in traditional Japan', *Continuity and Change*, 14/4, 2000.

史料一家系図について

データベース作成に際し用いた家系図は、上塩尻村在住佐藤八郎右衛門忠恕(1846-1909)により幕末～明治期にかけて作成されたものであり、同村に残された家系図の中で最も代表的なものといえる⁶⁾。それはむしろ家系図群というべきもので、八郎右衛門忠恕の属する佐藤家に限らず村内諸家のほとんどを網羅している。このような家系図群の作成目的については意見がわかれるが、当面次のような見通しを立てている。1) 社会・経済が急激に変化を遂げた幕末・明治初期、村内各家やマキ(マケ)の出自をあらためて明確にしておきたいという時代的欲求ないし流行、2) 縁組のための村内諸家に関する基本情報の獲得、の二つである。

実際に家系図を史料として用いるとなると即座に問題点がいくつか思い浮かぶであろう。なかでも家系図の史料的価値を下げる要因として大きいのは、自分の家系の権威づけのために作成するのが通常であるから、ともしれば虚構が混じるということである⁷⁾。そしてその虚構が必ずしも悪意の結果ではなく、想像力の産物であるにすぎない場合も往々にしてあったこと、古今東西を問わず言えることであろう。それゆえ、家系図のみならずそれをめぐる資料・データを可能なかぎり多角的に用いて検証を続ける努力が要求されるのである。

だがこうした一般的な点を除いても、上塩尻村家系図(群)の史料としての残り方に関して現在筆者がいささかのとまどいを覚える問題がある。それはこの家系図群の「へそ」とも言うべき佐藤総本家善右衛門家に関する記述の簡素さである。もちろん熟知しているひとびとであるからこそごく簡単にすませたと考えることもできる。だが、データベース作成に際しても基点をなすのは佐藤善右衛門家であり、なかんづく家系図作成中の同時代人は幕末期から明治期

6) 上田市上塩尻佐藤八郎右衛門家文書。

7) 拙稿「近代イギリス農村家族の家系図」歴史学研究会編『系図から見た世界史』2002年、青木書店、334-6頁を参照のこと。

にかけて日本の蚕種業発展の先導役を果たした15代善右衛門平作・縄薦^{つなね}（1815—1890）である。彼は明治期以降藤本を名乗り上塩尻村の蚕種販売を全国規模に展開していく。ところが、その直前の2代14代佐藤善右衛門（和蔵）と15代佐藤善右衛門（連蔵，民弥）の叙述はごく控えめで簡略なものである。あるいは簡略にすぎると感じられる。天明7年（1787年）に死亡した13代富信のあとの2代である。その両名についてこれまでわかっていることを述べれば、14代佐藤善右衛門（和蔵，民弥）（1783年に和蔵 11歳として宗門帳66に登場し、1788年に16歳で善右衛門になり、文政5年（1822年）100+101で50歳のときに死亡している。その男子久吾（寛政10年1798年 6歳，文化2年（1805年）13歳で連蔵に改名，文化10年（1813年）には平兵衛に，そして父の没年とともに善右衛門に，ついで安政3年（1856年）に民弥と改名した。この村の中樞に2代で70年近く位置した人物たちが，佐藤家家系図には生年・享年・戒名などごく最低限の叙述にとどまっているのである。やはり知悉のゆえになのであろうか。

かように，この時期には当時庄屋をつとめた佐藤嘉平次家とならぶ，分家（別家）筆頭に位置する八郎右衛門家の忠恕が総本家として仰ぐべき同時代人をかようにごく簡単に取り扱った理由はいったいなんであろうか⁸⁾。最近あらたに上田市博物館で閲覧可能となった佐藤家家系図（おそらく前述の家系図の土台となったものであろうが）は，善右衛門家のまさにこちらが知りたくてやまない部分が欠損している（資料3）⁹⁾。背景となる状況も現段階ではつかめ

8) 家系図作成にあたり，八郎右衛門忠恕は家系図作成に必要な作業すべてを1人で行ったわけではないであろうが，完成させたのは彼であろう。それでは八郎右衛門忠恕はどのような人物で彼をめぐる村の状況はどのようであったろうか。長く続く大家であれば避けがたいことであるが，佐藤家も一族内での大小悶着があった。それは家系図にも，また宗門御改帳にもよみとれる。しかし，八郎右衛門忠恕にとり衝撃であったと容易に想像しうるのが，彼のすぐ上の兄であり，八郎右衛門の先代でもある三喜助（佐藤家家系図2-8）の遭遇した火事，および三喜助自身の大火傷と死亡であろう。不慮の兄の死により家督を継いだ忠恕の心境の推移は現在のところ手掛かりはみつからないが，家系図作成の動機になんらかの関わりがなかったとは考えにくい。

9) 佐藤嘉三郎家文書3/2346。作成年代は記載内容からみて弘化3年（1846年）生まれの忠恕がまだ若年のころのものと思われる。見ようによっては手で破りちぎったかのようでもあるが，むろん真相は不明である。単に下書きとして作成したもので，間違いなどがあることがわかり反故として破り捨てただけかもしれない。

ておらず単なる偶然の結果かもしれないので皮相な憶測はさげたい。だが、いったんは草稿に記したものがなんらかの理由で欠損したのち、そのまま正本を作成したのであろうか。となれば村全体の家系図群を作成する手間ひまをいとわなかった人物が、なぜその枢要な部分を後世のものがすぐわかるようなかたちで（同村在住の人ならすぐにその欠落に気づくであろう）欠落にしたままにおいたのか¹⁰⁾。あるいは家系図作成後の欠損にすぎないのか。

つづくわえると、佐藤八郎右衛門家文書の「文禄ヨリノ代継名前帳」は「六代佐藤重次郎長祥」の作成になる文書がある。安永から弘化年間と忠恕の生まれたころまでの分家関係を記したものである。実際の作成年代は不明なのであるが、忠恕が家系図の編集・作成にあたり参照したであろうことは想像に難くない。実際問題として佐藤家の家系図は忠恕が集大成したものといってよいだろうが、それも彼の代だけではなく八郎右衛門家だけでも幾代かにかけて練り上げられていったものと見なしたほうがよいようである。ちなみに忠恕は家系図からすると9代目である¹¹⁾。

家系図群

上塩尻村においては、主要家族とそうでない家族とではその人数規模で歴然とした差がある。そしてなによりも佐藤家の一員である佐藤八郎右衛門忠恕の編になるため、彼の判断による順序にならうのが自然であろう。そのため、大規模な集団をなす主要家族4家（佐藤・山崎・清水・馬場）および準主要家族

10) 実はこの時代佐藤家でもっとも羽振りが良かったと思われるのは、家系図の序列でいえばむしろ、11番目の佐藤嘉平治家であり、忠恕の八郎右衛門家は同時代には実力としてはその下だったのかもしれない。この嘉平治もまた出自の存外わかりにくい人物なのである。欠損佐藤家系図において欠損カ所のすぐ後に善右衛門の兄弟として嘉平次が現れるが、宗門改帳では従弟となっている。

11) 実は家系図ならびに宗門改帳にはこの「六代 佐藤重次郎長祥」は見つからない。もしも6代八郎右衛門であるとすると天保14年（1843年）没であるので早すぎるため、7代八郎右衛門周助・安兵衛（佐藤善右衛門昌信三男）文化5年（1808年）為養子：嗣:1857年没（57歳）であれば符合するのだが。

である西原・春原家の順に家系図を一覧していくことにしたい。なお、「主要」「非主要」というのはあくまで仮の分類であり、分析の便宜上のものにすぎない。

主要家族（佐藤・山崎・清水・馬場）

佐藤家（19代，22+系統）

山崎家（8+代，24系統）

清水家（13代，23系統）

馬場家（14代，19系統）

西原・春原家

西原家（12代，12系統）

春原家（10代，7+他諸流：3+2+3+2+2+1+4）

非主要家族

瀧澤・塚田家（9代，2+11+1系統）

小祝家（10代，6系統）

高遠家（10代，3+2系統）

北澤家（11代，4+2系統）

小宮山家（9代，6+系統）

菅沼家（8代，4+系統）

別系統山崎家（13代，7系統）

白澤家（9代，3系統）

岩崎家（8代，1系統）

坂田家（10代，4系統）

西澤家（6代，1系統）

寺田家（7代，2系統）

鈴木家（含鈴木五右衛門家）（6代，1系統）（五右衛門家：4代，2系統）

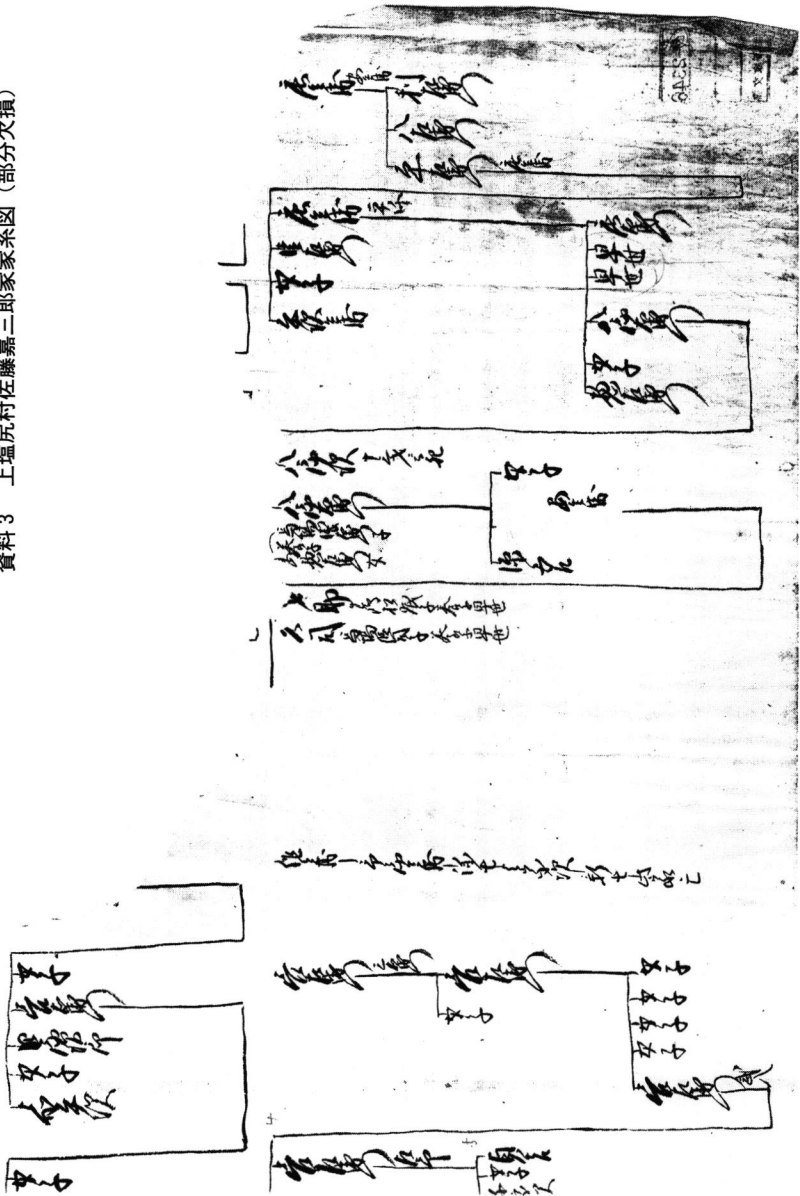
依田家（6代，2系統）

荒木家（4代，1系統）

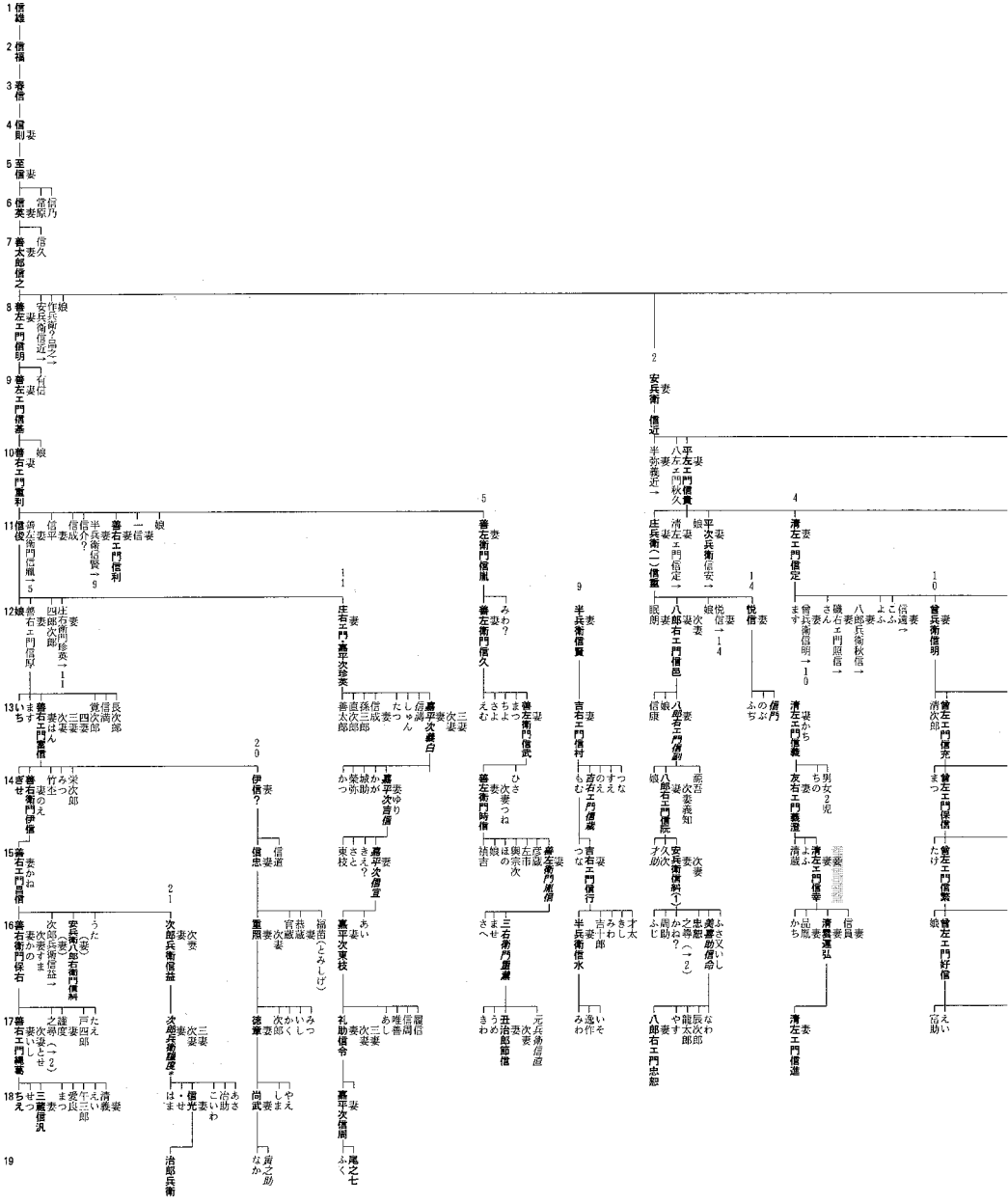
関家（10代，1系統）

高見澤家（4代，2系統）

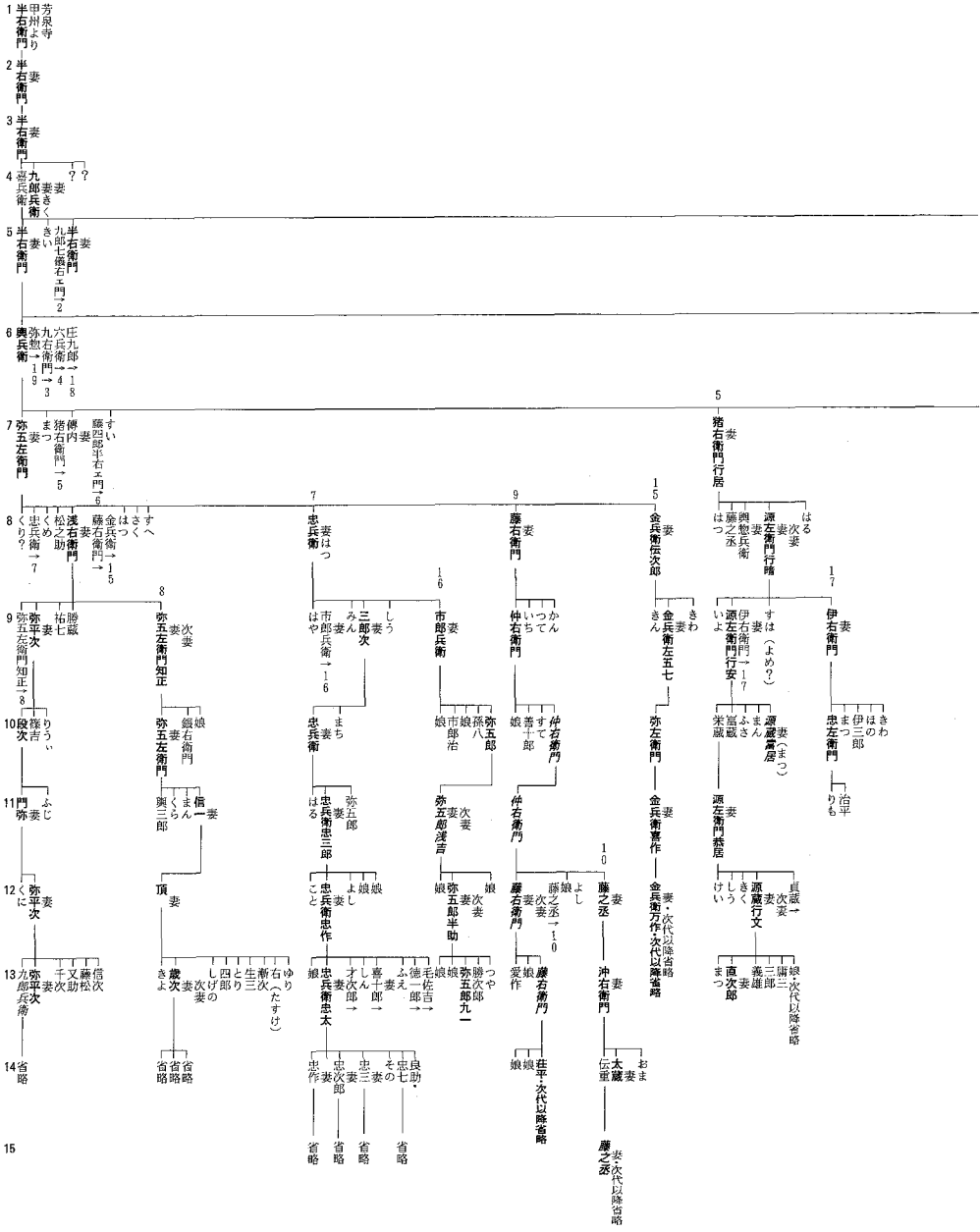
資料 3 上塩尻村佐藤嘉三郎家系図（部分欠損）



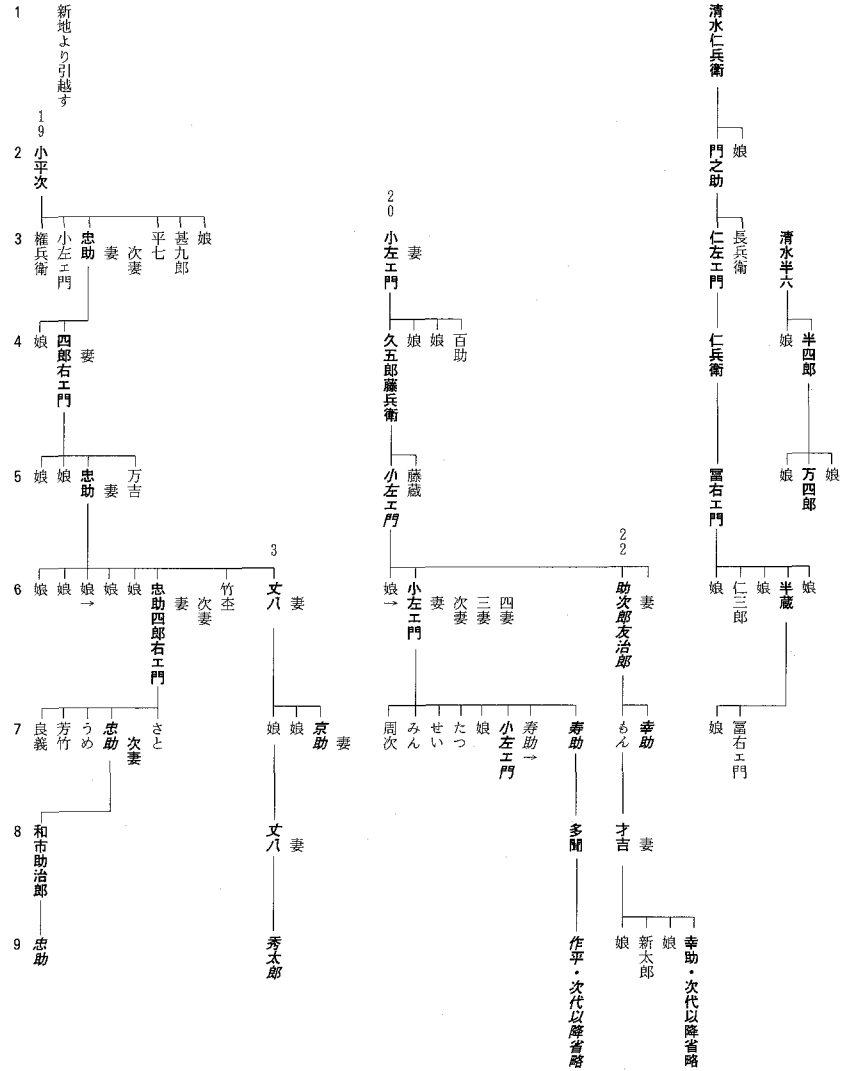
佐藤家家系図



馬場家家系図

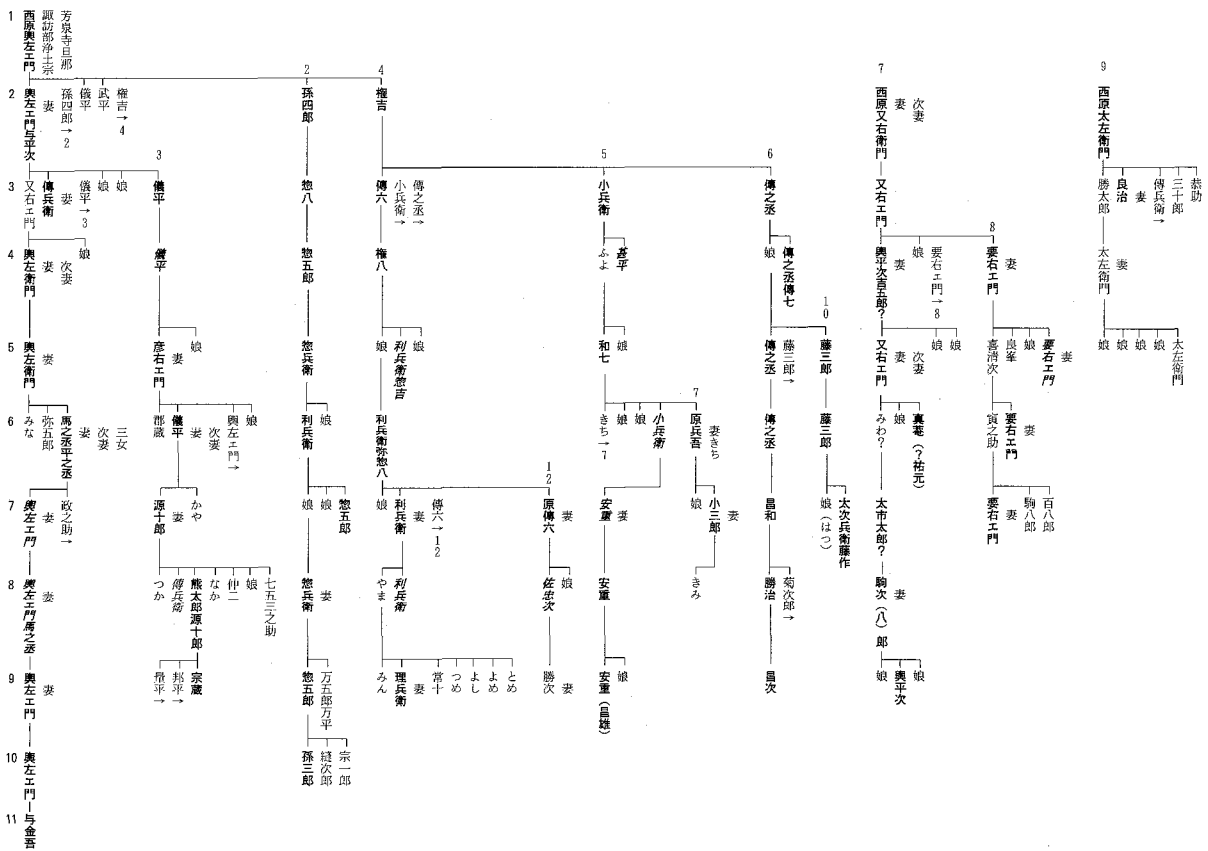


清水小兵次家家系図

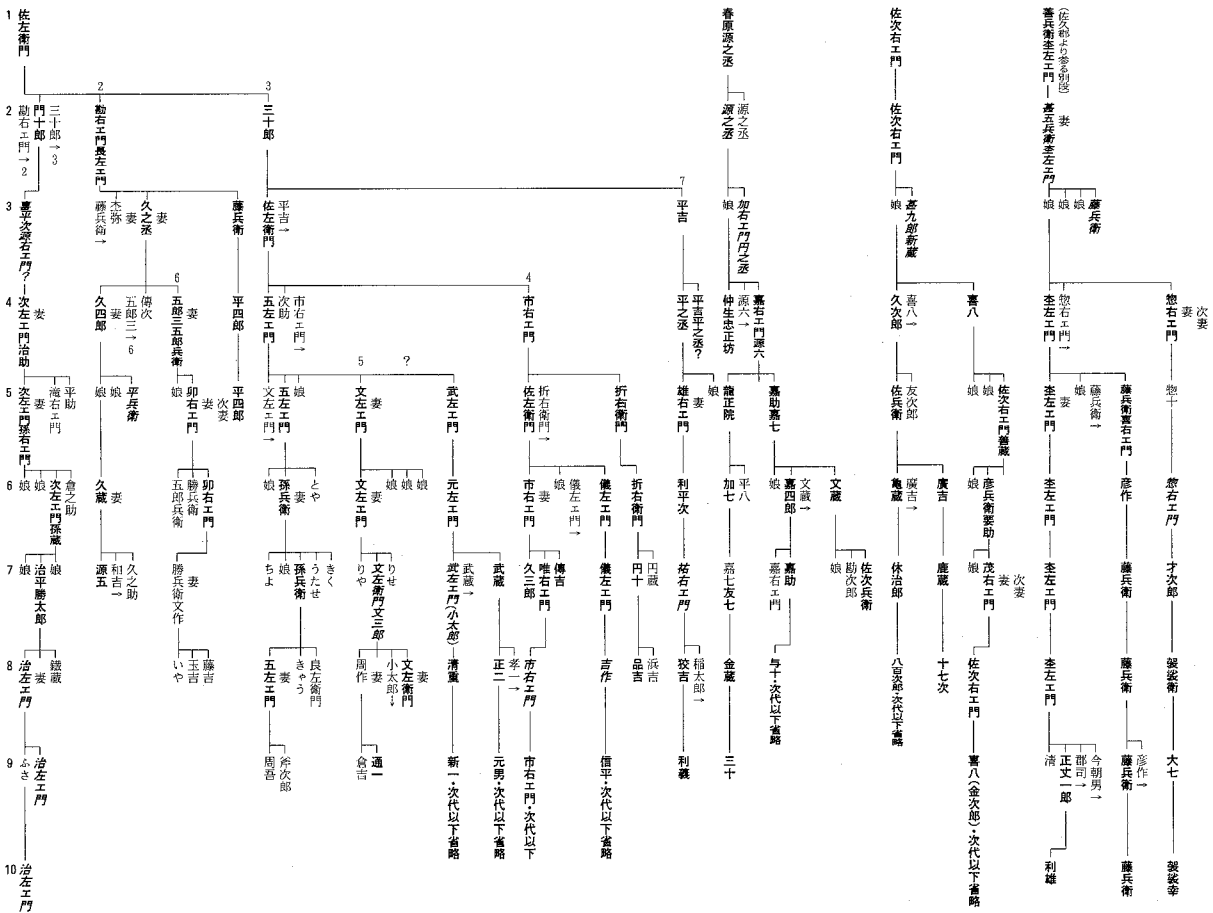


西原家系図

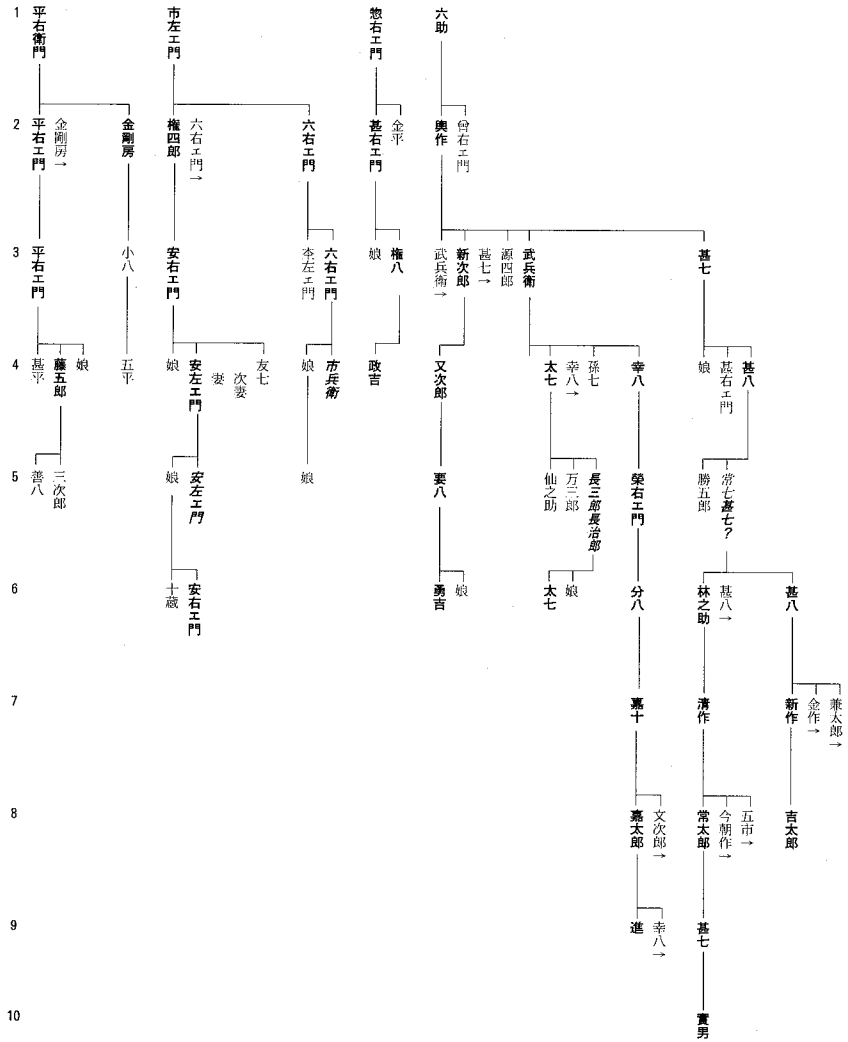
資料：旧土田藩上塩尻村家系図群



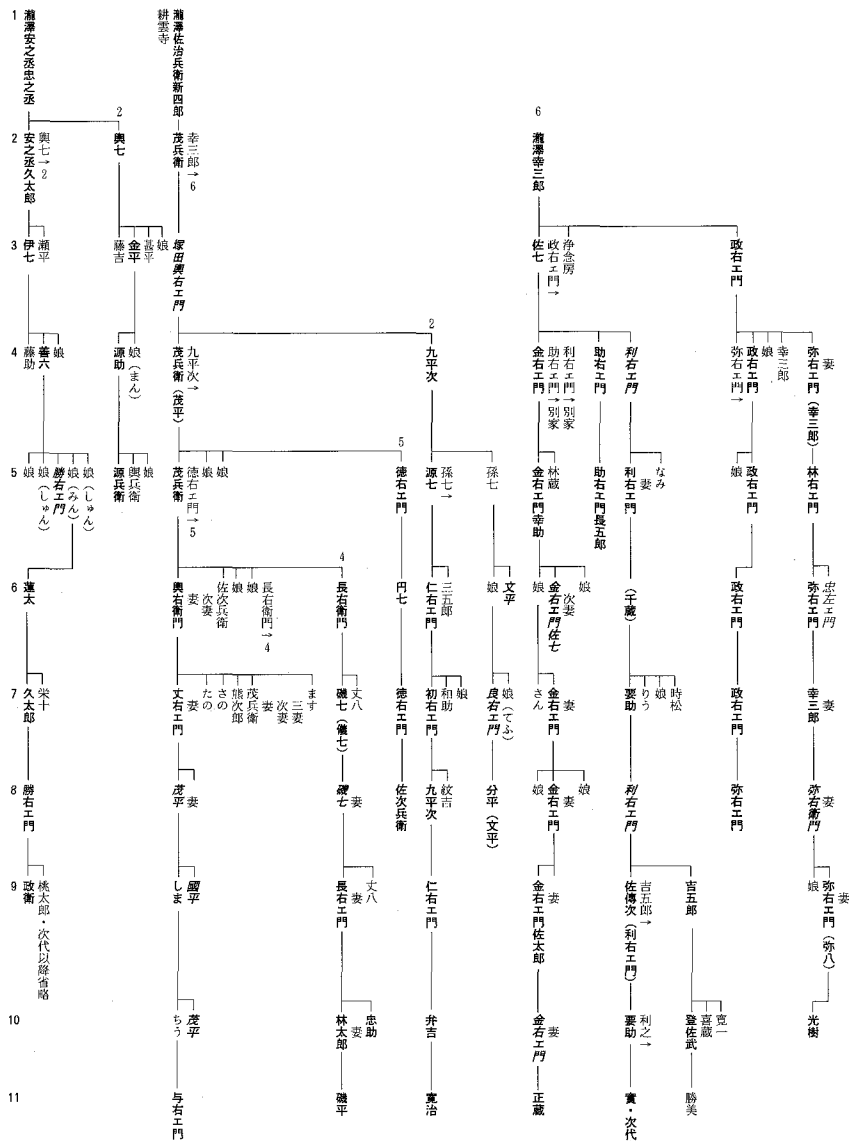
高橋家系図・1



春原家家系図・2

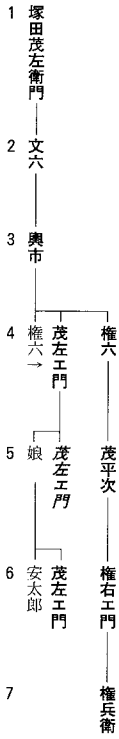


滝澤・塚田家家系図

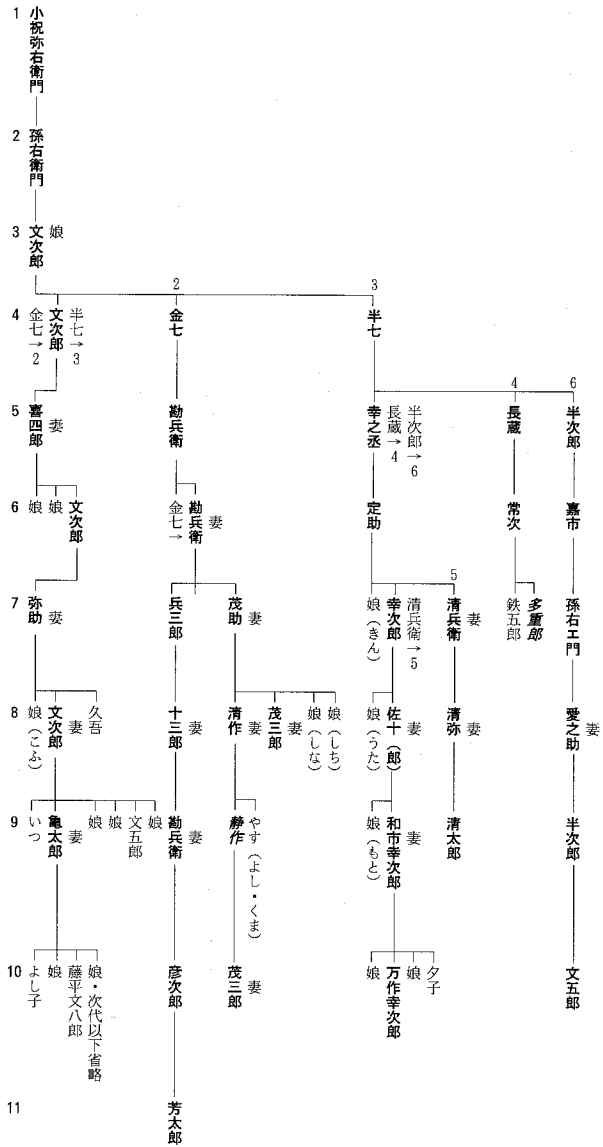


* 基本となるのは佐藤八郎右衛門忠恕編になる家系図であるが、滝澤光樹氏のご好意により閲覧させていただいた滝澤家家系図も参照した。

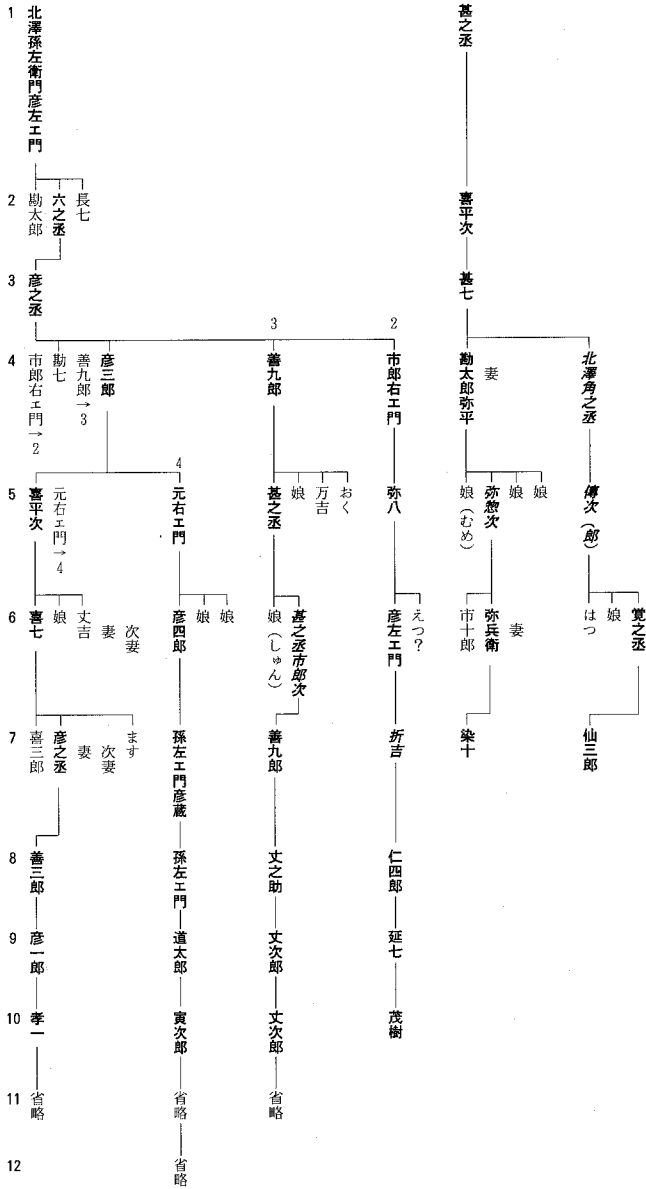
塚田茂左衛門家家系図



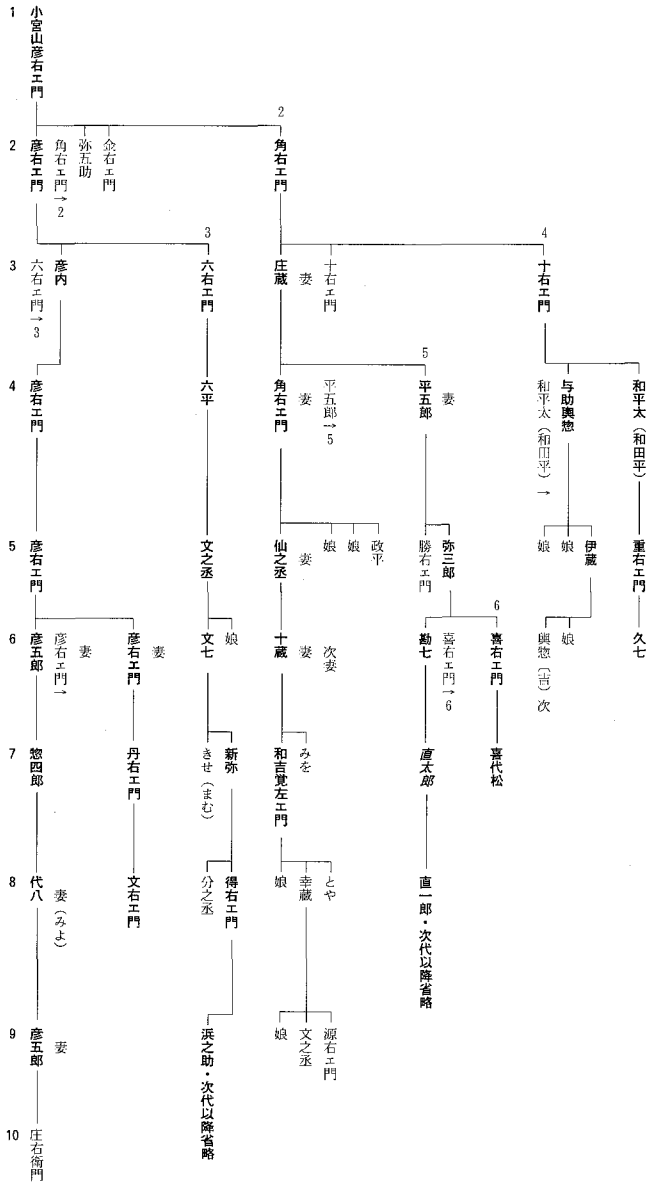
小祝家家系図



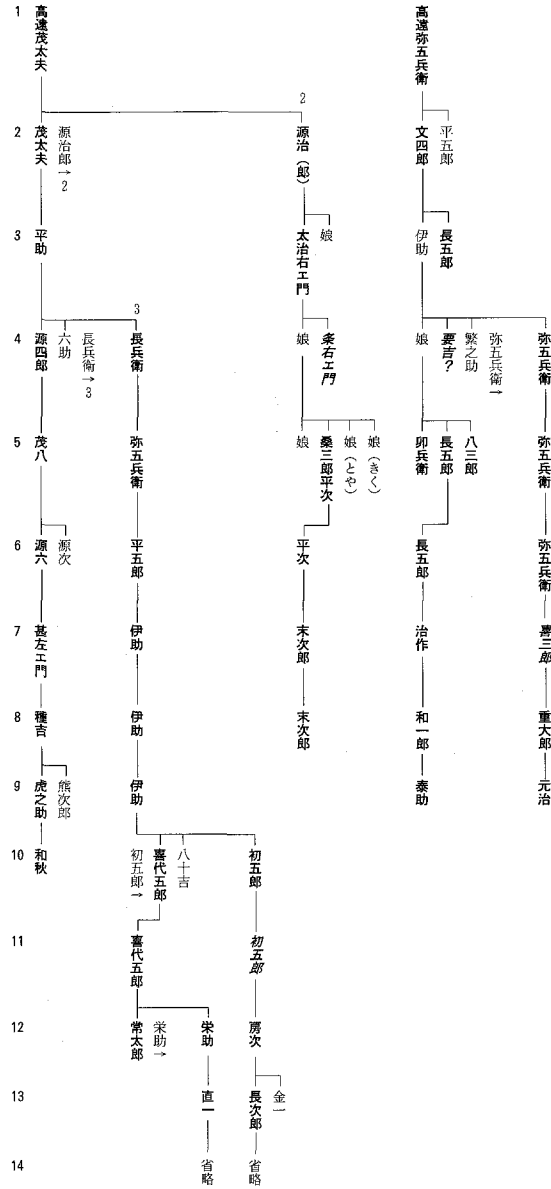
北澤家家系図



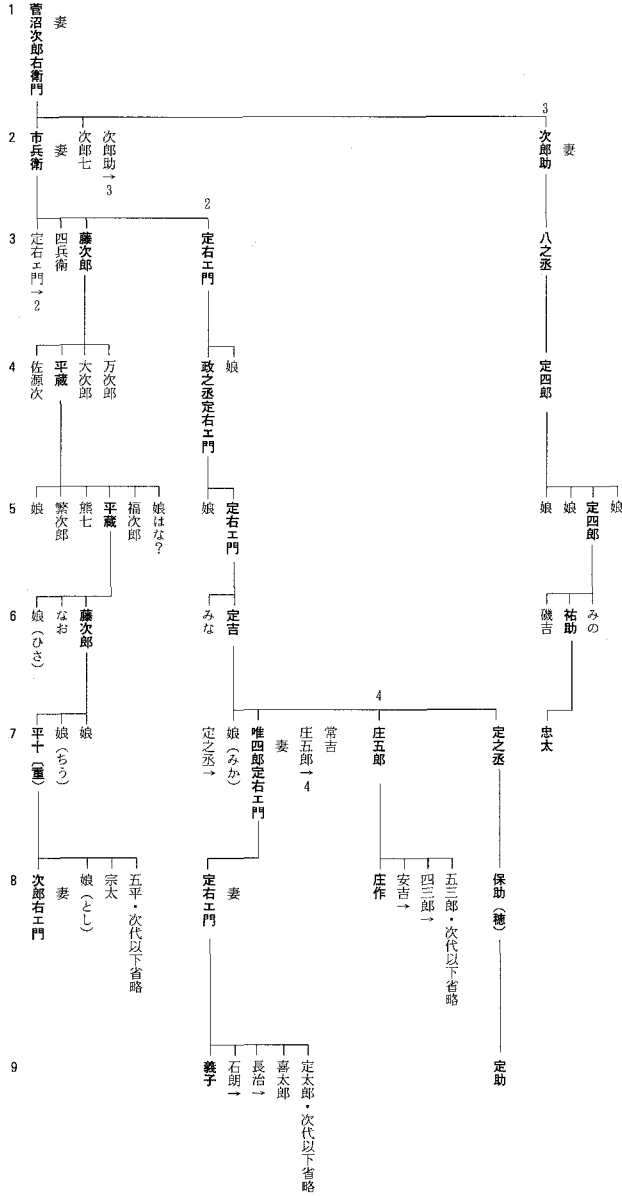
小宮山家家系図



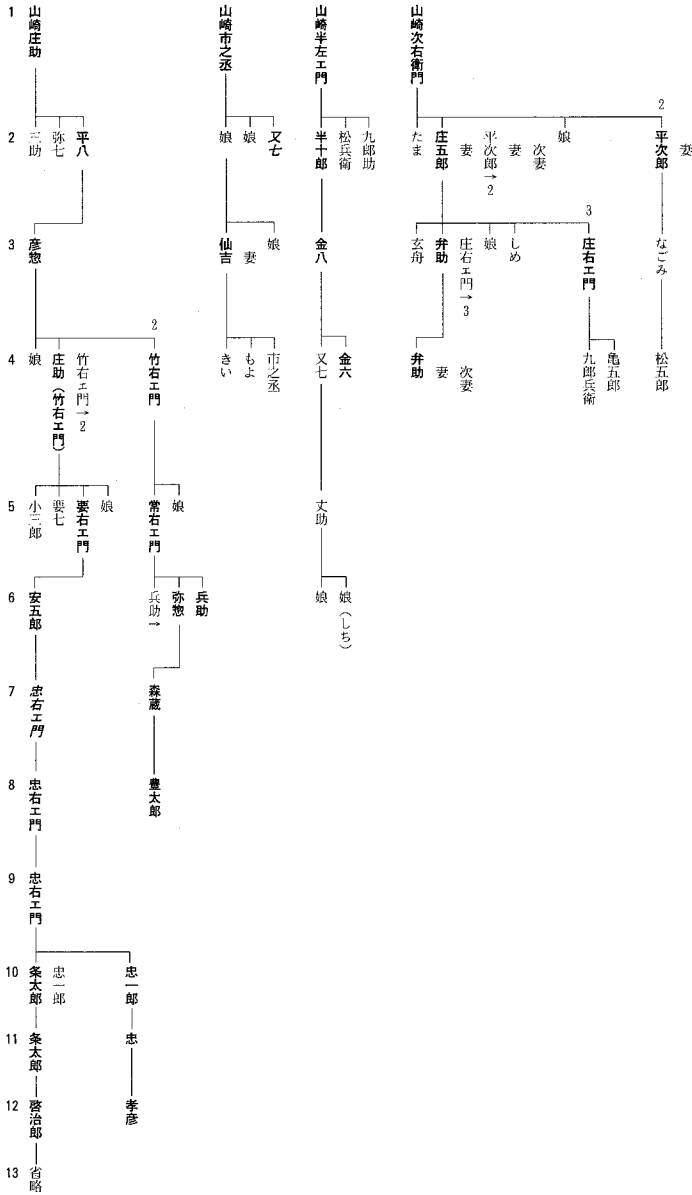
高遠家家系図



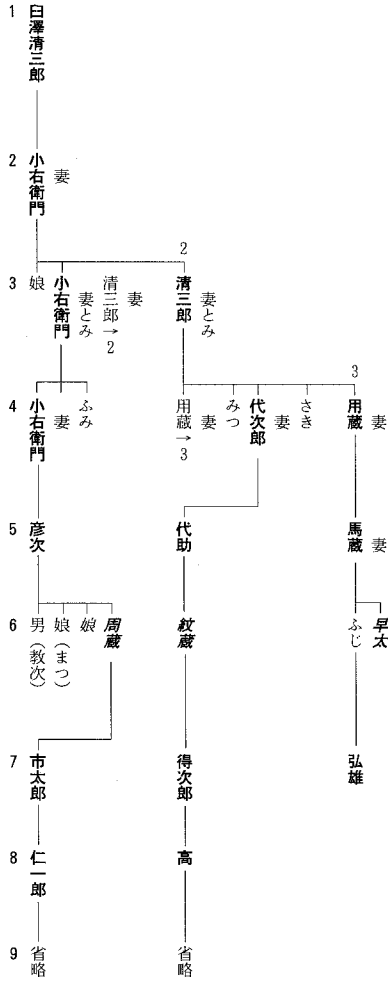
菅沼家家系図



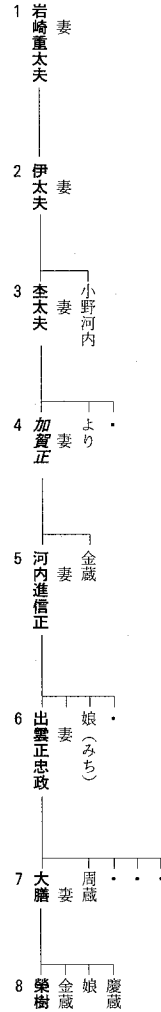
別系統山崎家家系図



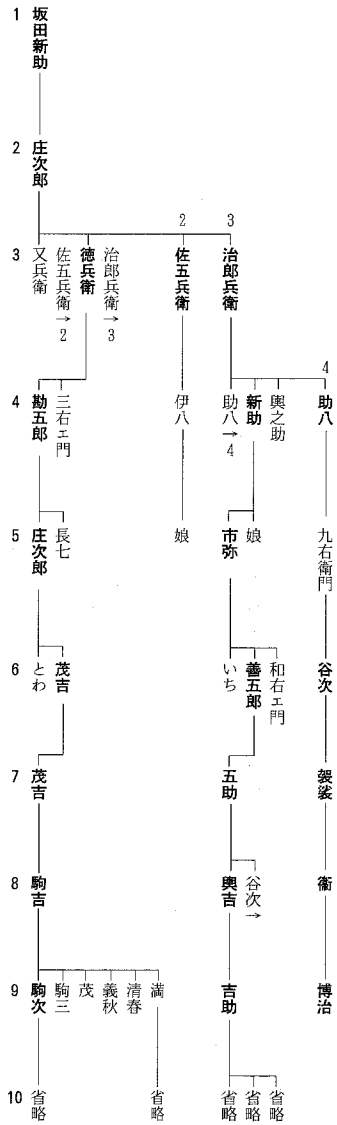
白澤家家系図



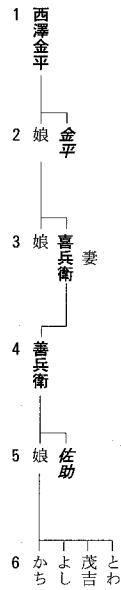
岩崎家家系図



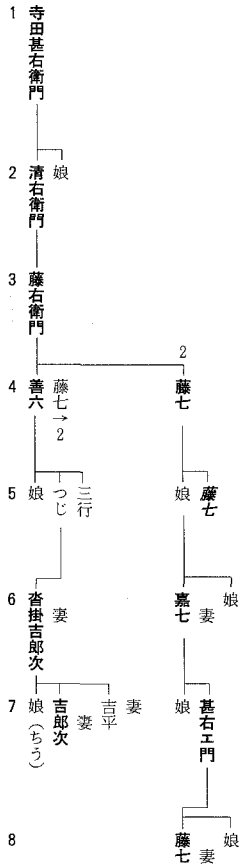
坂田家家系図



西澤家家系図



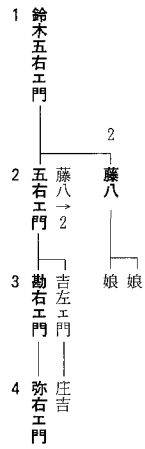
寺田家家系図



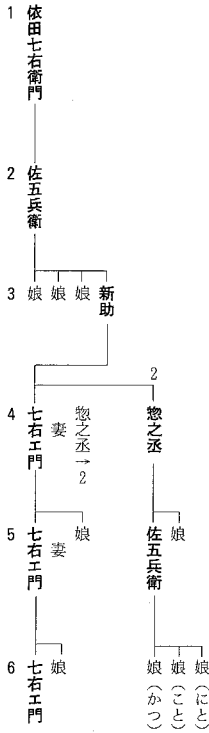
鈴木家家系図



鈴木五右衛門家家系図



依田家家系図



荒木家家系図



関家家系図



高見澤家家系図

